HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	新渡戸稲造と内村鑑三の武士道
Author(s)	ラフェイ, ミッシェル
Citation	基督教學, 45, 30-39
Issue Date	2010-08-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47479
Type	journal article
File Information	SC45_004.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

新渡戸稲造と内村鑑三の武士道

ミッシェル・ラフェイ

序章

現在一般に「武士道」という語が用いられる場合、その多くが明治期の武士道、つまり新渡戸稲造のいう「武士道」を指している。しかし菅野覚明は、明治武士道は本来の武士道ではないとし、[1]むしろ新渡戸の『武士道（Bushido, The Soul of Japan）』が明治武士道のイメージを作ったと指摘している。[2]

本論文では、明治武士道が本来の武士道であるか否かは問わない。ここで目指すのは、いわゆる「明治武士道」という枠組のなかで、明治を生きた新渡戸稲造と内村鑑三という二人の人間の「武士道」を比較することである。

I　侍としての新渡戸と内村

新渡戸稲造は一八六二年、盛岡で上級武士の末子として誕生した。新渡戸は五歳で元服を経験するが、その二年後に明治維新で帯刀が禁じられたため、刀を差していた時期は短かったようだ。新渡戸は当時のことを次のように語る。

> When I was told to drop it, not only did my loins feel lonely, but I was literally low in spirit. I had been taught to be proud of being a samurai, whose badge the sword was.[3]

新渡戸が侍としての誇りや思いを自らの言葉で語っているのに対して、内村にはそもそもこのような経験がないらしい。内村は、一八六一年に高崎藩の侍の長男として誕生した。内村は、“*I was born to fight*”と振り返り、父から儒教を習ったことや祖父が鎧を纏ったときが一番幸せそうだったと述べる。[4] 元服については内村自身の回顧では触れられていないが、十一歳で「祐之（ゆうし）」という元服名を父からつけられたようだ。[5]

新渡戸と内村は後に東京英語学校で出会う。年齢は内村の方が新渡戸より一つ上だったが、一八七七年、二人は同時に札幌農学校に入学した。二人は若い頃から生活を共にし、思想面でも影響を与えあったに違いない。こうした経緯を考えると、二人は武士道の概念を独自に創出したというよりも、ある程度一緒につくりあげたとするのが妥当だと考えられる。

Ⅱ　*Bushido, The Soul of Japan*の形成と内村の武士道に関する書物

まず、一九〇〇年にアメリカで出版された新渡戸の『武士道』をみていこう。新渡戸はアメリカ人の妻メアリー、またはベルギーの法学大家ド・ラヴレーの疑問に答えるために、『武士道』を書くことを決めた。[6] 新渡戸は『武士道』の序論で、ド・ラヴレーが日本の学校で宗教的指導がないことに驚き、どのように道徳を教えるのかと問われた話を紹介している。新渡戸はその問いにショックを受け、答えられなかったという。[7] その後、新渡戸は自らの道徳を分析し、“I found that without understanding feudalism and Bushido, the moral ideas of present Japan are a sealed volume.”という結論に至った。[8]『武士道』では、義、勇・敢為堅忍の精神、仁・惻隠の心、礼、誠、名誉、忠義という七つの要素をとりあげ、「道徳体系としての武士道」の説明として各章で論じている。[9]

一方内村については、武士道のみを特に主題としている著作はない。しかし、*Representative Men of Japan*という外国人向けに英語で書かれた著作では、武士道に類した概念がみられる。またそれ以外にも、武士道が題名に含まれて

いる短い記事がいくつかある。例えば内村は、一九一八年の「武士道と基督教」で、武士道について「正直なる事、高潔なる事、寛大なる事、約束を守る事、借金せざる事、逃げる敵を逐はざる事、人の窮境に陥るを見て喜ばざる事」という特徴をあげている。(10)

そこで以下では、武士道に関する二人の言及について、類似点と相違点に着目しつつ、その概念の内容を検討していきたい。

Ⅲ　道徳制度

上述のように、新渡戸は武士道を「現代日本の道徳」制度であると見ていた。内村も「武士道は日本人の道であります。之を日本道徳と称して間違ないと思ひます」と主張している。(11) しかし新渡戸も内村も、キリスト教徒として、キリスト教の道徳と武士道の道徳は相反するものではなく、調和するということを示そうとしていた。そしてこの点に関して、内村は新渡戸よりもより徹底した考えを持っていたと言える。なぜなら内村は、この世の問題は武士道で解決できるが、あの世のことは、宗教、つまりキリスト教に任せるしかないと考えていたからである。したがって、生きている間に最も理想的なキリスト教徒になるためには、武士道もキリスト教も両方必要だということになる。こうした認識から「武士道を棄、又は之を軽ずる者が基督の善き弟子でありやう筈が無い」(12)、「日本武士は最上の基督信者を作る」(13)といった強い主張がなされるのである。

内村の強い姿勢と比べて、新渡戸はいくぶん表現を弱めて、武士道は独立した道徳制度として姿を消すかもしれないが、その力は残ると述べている。(14) さらに武士道が日本の道徳であり、かつ道徳制度として十分なものであるという考え方に反対して、キリスト教の宣教師が日本の「道徳教育」に大きな貢献をしているとも述べている部分がある。(15) 以上の点をみると、やはり新渡戸は、武士道に欠落している部分があると考えていたように思われるのである。

Ⅳ　外へ、内へ

すでに述べたように新渡戸の『武士道』は、武士道概念を外国人に向けて包括的に提示する試みであった。『武士道』と内村の著作を比較すると、直ちにある大きな相違に気がつく。それは内村が絶えず「武士道」と「キリスト教」を結びつけようとするという点である。[16] この相違は、二人が武士道を語る際に何を目的としていたかに由来する相違でもある。

『武士道』や*How I Became a Christian: Out of my Diary* と *Representative Men of Japan* は、新渡戸と内村の活動初期に属する作品であり、その後、二人は異なる道を歩むことになる。新渡戸は、侍にみられるある特徴、つまり「武士は本質的に行動の人であった」[17] をモットとして自分の人生に取り入れ、教育活動や国際活動に活発に取り組んだ。すなわち新渡戸は、武士道的な考え方を日本の外へ発信し、キリスト教に代表される外国人の道徳が、日本の道徳とそれほど異質なものではないことを示そうとしていた。逆に内村は、日本国内での活動に尽力し、日本人に対して、キリスト教の道徳が武士道の道徳とさほど変わらないことを証明しようとしていた。内村は自分を「行動の人」よりも「文字の人」だと考えており、著作活動によって日本および日本人に影響を与えようとしていた。新渡戸は外へ、内村は内へ――二人はそれぞれ異なる方向へと向かっていたのである。

Ⅴ　建国

新渡戸と内村とでは活動の方向性が違っていたとはいえ、明治維新を体験した二人は、日本の将来に同じように深い関心を持っていた。したがって二人の武士道に関する著作に一貫して登場するテーマは、建国である。新渡戸と内村はキリスト教徒だが、新しい日本を作り上げることに成功したのは、キリスト教の影響ではなく、武士道のおかげだと強調する点で一致している。新渡戸は、次のように述べている。

No, as yet Christian missions have effected but little visible in moulding the character of New Japan. No, it was Bushido, pure and simple, that urged us on for weal or woe.[18]

内村も、新渡戸と同様に、キリスト教[19]が日本に伝来する以前に「我等は人生の大抵[たいてい]の問題は武士道を以て解決する」と述べている。[20] さらに新渡戸と同じく内村も、西郷隆盛を「武士道の模範」あるいは「武士の好模範にして新日本建設の基礎的人物」だと述べている。[21]

しかし、明治維新によって封建制度と武士道の実践は終焉を迎えた。新渡戸と内村は日本という国家を進歩させる必要性を感じていたが、その際、武士道だけでは不十分で、新しい思想、つまりキリスト教の思想が必要だと考えていた。この考え方を特に強く主張したのは、内村の方であった。菅野は「新渡戸の本音は、当時の多くの日本キリスト者と同様、『武士道の上に接[つ]ぎ木[き]されたる基督教』（内村鑑三）を打ち立てることにある」[22]と述べるが、『武士道』のなかでは、新渡戸がそのような考えを断固としてもっているという印象は受けない。それどころか、当時のアメリカとイギリスのキリスト教があまりにも粗末なものなので、武士道と「接ぎ木」するにはふさわしくないと批判している。[23]

晩年の内村が熱心に「接ぎ木」を唱えたことは、「人類の理想はキリストである、日本人の理想は武士である、而して武士が其魂を失はずして真にキリストを信ぜし者が余輩の理想である」[24]という言葉からも明らかである。内村はさらにこの発想を拡大させ、武士道に接ぎ木されたキリスト教は、日本だけでなく世界をも救うという「日本国の天職」にまで至る。[25] このように、武士道が日本の天職の助けとなるという発想は、新渡戸の『武士道』には見られない。

Ⅵ　男らしさ・女らしさ

二人の武士道概念を見ていくと、共に男らしさ・女らしさに関する言及があることに気づく。新渡戸にも内村にも、武士道は「男らしい」ものだという認識があった。新渡戸は“Bushido being a teaching primarily intended for the masculine sex . . .”と述べ、武士道が女性に求めている性質は、あまり女性らしくないものだったと指摘している。[26] 確かに『武士道』のなかで最も長い章は「婦人の教育および地位」という題名になっている。また一方では、女性の束縛された生活や家の名誉のために人生を犠牲にしたことが描かれ、[27] 他方では、“I shall be guilty of gross injustice to historical truth if my words give one a very low opinion of the status of women under Bushido.”と述べるなど、矛盾するような記述もある。[28] もっとも、アメリカ人の女性と結婚した新渡戸が、揺れ動く女性観を示すのも、決して不思議ではないのかもしれない。

第五章「仁・惻隠の心」では、新渡戸はこの特徴が「男性的」な正義に対置されるもので、「仁」は「母のごとく」と「慈愛」は「女性的なる柔和さ」があるとしている。[29]『武士道』の最後の章「武士道の将来」では、内村との大きな相違点が明らかで、“Beneath the instinct to fight there lurks a diviner instinct ——to love.”[30]と彼は書いている。さらに、儒教の仁と仏教の慈悲は、いずれキリスト教的愛という概念に広がるだろうと予告している。[31]

ここには内村の思想との差が如実に現れている。内村は、男らしいキリスト教を好んでいる。一九二八年の「武士道と基督教」のなかで、イエスによる神殿の清めを例に、「優しいイエス様ではなくして、怖い恐ろしいイエス様」だと強調し、そのときのイエスの行為を「武士として最も勇敢なる行為」と評価している。[32] そして多くの日本の武士がキリスト教徒になったのは、「イエスの武士気質に幸かれて」、「イエスの武士らしき性格に憧憬れた」からであるという。[33] 新渡戸は、正義は男性的で、慈愛は女性的としていたが、内村は、愛の九割は“righteousness”〔義〕と考えており、男性的で武士の要素を含んだキリスト教を求めていたことが読み取れる。[34]

Ⅶ　結論と『武士道』への批判

これまでの議論を振り返ると、新渡戸と内村は武士道を日本の道徳だと考えており、その道徳は日本を封建制度から解放し、新日本の建設へ導くものだと信じていた。こうした考え方が新渡戸を国際活動へ導き、内村には日本の天職というインスピレーションを与えたのである。二人は共に武士道を基礎におきながら、異なる方法で各々の活動を行い、独自のキリスト教信仰を形成したのである。

本論では二人の思想の比較を眼目としたので、二人の発想には問題が含まれていないという印象を与えるかもしれない。しかし実は、彼らの武士道概念に対する批判は、国内外あるいは時代を問わず数多くみられる。[35] 当時の外国人も日本人と同様に厳しい批判をした。イギリス聖公会のあるメンバーは、新渡戸の本が天皇崇拝へ立ち戻らせるものだとみた。[36] あるいは、武士道が日露戦争の成功にはほとんど影響も関係もないと指摘したイギリスの軍人もいる。[37] 国内では、植村正久が武士道とキリスト教を関連つけることに対して不信の念を表明した。[38] また、新渡戸が侍を理想化してしまったと述べ、武士道を弁護しすぎだとも言っている。[39] 現代において、太田雄三は、新渡戸の著作に間違った歴史の事実が数多くあると批判している。重要な例を一つあげると、新渡戸は、自ら「武士道」という語を作ったと信じていた。[40]

これらの批判をみると、新渡戸も内村もともに武士道を理想として考えていたのは確かだが、それは、（英語でいういわゆる）バラ色ではなく、いわば「桜色」の理想であり、過大評価されていたと理解せざるをえないのである。

注

（1）菅野覚明『武士道の逆襲』講談社、二〇〇四年、二八一頁。

（2）同書、十、十一頁。

（3）新渡戸稲造 *Reminiscences of Childhood in the Early Days of Modern Japan*『新渡戸稲造全集』教文館、一九七〇年、第十五巻、五〇八頁。もちろんこの文章は七歳の新渡戸が書いたわけではないので、侍が持つ刀への思いが後の時代のものであることは否定できない。

（4）内村鑑三 *How I Became a Christian: Out of my Diary*『内村鑑三全集』岩波書店、一九八二年、第三巻、八頁。『内村鑑三全集』は以下では『全集』とする。

（5）鈴木範久『内村鑑三日録一　一八六一～一八八八　青年の旅』教文館、一九九八年、二七頁。なお、内村はこの名前を自分では用いなかったが、代わりに長男につけている。

（6）Inazo Nitobe, *Bushido, The Soul of Japan*, IBC Publishing, 2003, p. viiii. 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳『武士道』岩波書店、一九三八年、十一頁。ド・ラヴレーはEmile Louis Victor de Laveleyeである。

（7）ibid. 矢内原訳、同頁。

（8）idem, pp. viiii, x. 矢内原訳、同頁。

（9）idem, p. 21. 第一章は“Bushido as an Ethical System”「道徳大系としての武士道」である。矢内原訳、二五頁。

（10）内村鑑三「武士道と基督教」『全集』、一九八二年、第二四巻、八頁。

（11）同「武士道と基督教」『全集』、一九八三年、第三一巻、二九二頁。

（12）同「武士道と基督教」『全集』、一九八二年、第二四巻、八頁。

（13）同「武士道と基督教」『全集』、一九八三年、第三一巻、二九六頁。

（14）Inazo Nitobe, *Bushido, The Soul of Japan*, p. 176. 矢内原訳、一四九頁。

（15）“For myself, I believe that Christian missionaries are doing great things for Japan——in the domain of education, and especially of moral

education . . .” idem, p. 160. 矢内原訳、一三六頁。

(16) 飯田鼎「福沢諭吉と武士道――勝海舟、内村鑑三および新渡戸稲造との関連において――」『三田学会雑誌』慶応義塾経済学会、八三巻一号、一九九〇年四月、二八－二九頁。

(17) Inazo Nitobe, *Bushido, The Soul of Japan*, p. 97. “A samurai was essentially a man of action.” 矢内原訳、八六頁。

(18) idem, pp. 160, 161. 矢内原訳、一三六頁。

(19) この場合は、もちろん古来に伝えられたカトリックではなく、開国してまもなく入って来たプロテスタントをさしている。

(20) 内村鑑三「武士道と基督教」『全集』、一九八二年、第二四巻、八頁。

(21) 同「武士道と基督教」『全集』、一九八三年、第二七巻、五二一頁。

(22) 菅野覚明『武士道の逆襲』講談社、二〇〇四年、二七五頁。

(23) “Christianity in its American or English form— . . . is a poor scion to graft on Bushido stock.” Inazo Nitobe, *Bushido, The Soul of Japan*, p. 166. 矢内原訳、一四〇頁。

(24) 内村鑑三「キリストと武士」『全集』、一九八一年、第十一巻、二四一頁。

(25) 同「日本国の天職」『全集』、一九八一年、第一巻、二八四－二九四頁。この記事は一八九二年二月に執筆した英文の字訳である。“Japan’s Future as Conceived by a Japanese〔Japan: Its Mission〕”『全集』、一九八一年、第一巻、二四三－二五四頁。

(26) Inazo Nitobe, *Bushido, The Soul of Japan*, p. 134. 矢内原訳、一一六頁。

(27) idem, pp. 138-142. 矢内原訳、一一〇－一一四頁。

(28) idem, p. 142. 矢内原訳、一一二－一一三頁。

(29) idem, p. 53. 矢内原訳、五二頁。

(30) idem, pp. 170, 171. 矢内原訳、一四五頁。

（31）idem, p. 172. 矢内原訳、同頁。

（32）内村鑑三「武士道と基督教」『全集』、一九八二年、第三一巻、二九四―二九五頁。

（33）同書、二九六頁。

（34）同 “Love and Righteousness,”『全集』、一九八二年、第三〇巻、二二頁。

（35）近年において新渡戸に対する批判を展開したのは太田雄三、内村の武士道とキリスト教に関する思想に対して厳しい批判を行ったのが坂本辰朗である。

（36）John F. Howes, Ed., *Nitobe Inazo: Japan's Bridge Across the Pacific*, Ion, A. Hamish, “Japan Watchers: 1903-1931,” Westview Press, Inc., 1995, p. 101.

（37）idem, pp. 88, 89.

（38）ジョージオーシロ『新渡戸稲造――国際主義の開拓者』中央大学出版部、一九九二年、九〇―九一頁。

（39）John F. Howes, Ed., *Nitobe Inazo: Japan's Bridge Across the Pacific*, Ota Yuzo, “Mediation Between Cultures,” Westview Press, Inc., 1995, p. 249.

（40）idem, p. 242.